

## ワークショップ2：『日本の大学で履修する外国語としてのスペイン語の能力の何をいかに評価するか』

担当： 長瀬由美

ELEにおいて教員は現在、学生の何を測っており、何を測るべきなのだろうかという問題意識からこのワークショップを設けた。スペイン語についての知識の到達度を測るのか、言語能力の熟達度を測っているのか、それとも「やってもできない学生（この定義については、後から示すように、教員の任務に照らし合わせた基本的な問題意識、つまりやっても空回りしているのは学生のせいなのかということ、を筆者は提示したい。）」には出席点などに代表される、達成を伴わない時間の投資「努力」を測って知識にも能力にも到達・熟達はしていないが「意図はせずとも恣意的に」合格としているのか。あるいは小テストの集計などに代表される到達度を熟達度に振り替えて最終評価にしているのか。

一体、何を基準にして何を測るべきなのか。評価にどこまでの柔軟性が、なぜ許容されるのか。教員各々が抱える評価の現状や問題点・工夫を皆で共有し、改善・向上に資するという目的で19人のスペイン語教員が集まり、次に述べるサブテーマで三つのグループに分かれ、それぞれ討論をし、その内容をまとめた。

-サブテーマⅠグループ：「最終評価の決め方（平常点を組み込む場合、その組み込み方）」

1. 最終評価の配分は、各授業ごとに到達度を測り、最終試験にて熟達度を測るものとしている。
2. 教師が学生を評価し、学生はそれぞれ自分自身を、また他の学生を評価するようにしている。
3. 出席点については、欠席が多過ぎると評価対象から外れ、不合格となるか、もしくは減点対象となる。
4. 不公平な評価をしないために、主観的評価を最低限に抑えられるようエクセルなどの表計算を使うなどして数値化する。

-サブテーマⅡグループ：「試験問題の出題および採点の仕方」

A.日本人グループ：

1. 試験の方法
  - 和訳、単語の確認。
  - 動詞の活用を書かせる、または言わせる。
  - 条件を付加するあるいは限定する。例えば主語を書かねばならないとか、複数ある答えのうち一つだけを述べよ、など。
2. 採点方法
  - 主観的評価
  - 学生同士の評価

B.ネイティブグループ：

1. 評価における柔軟性はあるべきである。
2. 教科により評価内容に優先順位をつける
  - 内容が重要である。
  - 意味のある会話が維持できるか。
  - 努力しているか。
  - 間違ふことを恐れずに率先して答えようとするか。

注1 「propina」あり

注2 受講生の人数によって評価システムに変動あり。

注3 流暢さと発音の評価については教員により意見が分かれるところである。

-サブテーマⅢグループ：「不合格学生への合格判定基準」

- コースを通じての態度と経過により不合格のままとするか、合格にするかを判定する。
- 不合格点を合格点に上げるための課題を出す。
- 最終試験ではどこまで伸びたか。
- 出席率は？出席態度は？
- 合格にするための救済措置を講じることに踏み切る最低点は何点か。50点までか？
- 救済措置：課題（日記を書かせる、テキストを翻訳させる、スペインについて日本語でレポートを書かせる、手書き・パソコンで教科書を書写させる、等）

## まとめ

学生に対して外国語としてのスペイン語を1. 決められた時間内に、2. 設定された到達目標まで、3. 教授し、4. 使えるようにさせる、のがわれわれスペイン語教員の任務である、と解釈するならば、客観的に公平な評価をすることを標榜しているにもかかわらず、サブテーマⅢグループで議論された「不合格学生への合格判定基準」を設定するのは教員自身の責務の不履行を、設定レベルまでの言語習得完了という目標には直接的に関係のない課題を学生にこなさせることで帳消しにしようという企てと読むことは出来まいか。いや、「学生が」勉強しなかったのか。それとも「教員の」働き掛けが方向違い、または不十分だったのでは？（筆者自らを省み、敢えて辛口なのをご容赦頂きたい。）

教室内の現状には基礎学力が、受講態度が、学習能力が、動機が、などなど、教員泣かせの問題は、山積する。

しかしながら、『登録した学生一人一人の「努力」を期限内に到達度や熟達度に昇華させてやる』という、教員の任務における、この「必死の」指針は譲ってはならないのではなかろうか。この前提に立ったとき、「評価」と、学生の努力の導き方、教員のコース運営との抜本的な改革が見出せるかも知れない。

口頭でのまとめにおいて、日本では「努力が大事である」という倫理観が多用されるように、教育をまず規律的な、道徳的な人間形成と捉える傾向があるのではないかと指摘したが、筆者は学生と教員の協働作業により前述の「必死の」の指針を貫き通す過程においてこそ、与えられた課題を期限内に完遂する、苦手を克服する、仲間と助け合うなどの「教育」が実現されるものと信じることを付記しておきたい。